

国指定史跡

# 武藏国分寺跡

— 平成20年度 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査 —



僧寺伽藍中枢部（南から）

2010年3月

国分寺市遺跡調査会  
国分寺市教育委員会

## はじめに

武藏国分寺跡は、全国の国分寺跡と比べても規模が大きく、その歴史的重要性はつとに認められています。寺院跡は、大正11年に中心城が国の史跡指定を受け、その保存が図られるとともに、部分的な調査や整備が行われてきました。

国分寺市では、郷土の歴史を語り継ぐよりどころであるとともに、豊かな自然を残す場として、市民に広く親しまれてきた武藏国分寺跡を、周辺の都市化から保護・保存し、史跡公園として整備・活用するための環境整備事業を推進しています。

事業は、市の付属機関である国分寺市史跡武藏国分寺跡整備計画策定委員会での審議を経て、策定した保存管理計画と整備基本構想、整備基本計画に基づいて実施しています。

旧整備基本計画（平成2年度策定）に基づいて、平成4～14年度に施工した尼寺地区整備事業に引き続き、新整備基本計画（平成14年度策定）に基づいて、平成15年度から僧寺地区整備事業に着手しています。

## 例言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する国指定史跡武藏国分寺跡（僧寺地区）の史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査の平成20年度の概要報告書である。
2. 発掘調査は文化庁と東京都の補助金を受け、国分寺市教育委員会が調査主体になり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。
3. 「調査に至る経過と調査計画」、「僧寺跡の環境と既往の調査」については、国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会2006『武藏国分寺跡発掘調査概報32』を参照されたい。
4. 発掘調査から概報作成にいたるまで、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また、地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

荒井健治・有吉重蔵・池上悟・江口桂・北原實徳・須田勉・塚原二郎・西野善勝・服部敬史・福田健司・山路直充・和田信行（五十音順・敬称略）

5. 遺構記号は下記の通りとし、Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。

SA 墳跡・柱列跡 SB 磨石建物跡・掘立柱建物跡 SD 溝跡 SF 道路跡  
SK 土坑 SI 住居跡・工房跡 SX 特殊遺構 P 小穴・小柱穴

## 6. 平成20年度の調査体制は次の通りである。

### 【役員および監事】

会長	坂詰秀一	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	岡口雄基	国分寺市文化財保護審議会副委員長
理事	星野信夫	国分寺市長
	内田 修	国分寺市教育委員会委員長
	松井敏夫	国分寺市教育委員会教育長
	星野亮雅	元国分寺市社会教育委員
	北原 進	国分寺市文化財保護審議会委員
	坂本克治	国分寺市文化財保護審議会委員
	遠藤泰郎	国分寺市文化財保護審議会委員
	小菅政治	東京都教育庁地域教育支援部 管理課長
専務理事	竹内 惟	国分寺市教育委員会教育次長兼部長
監事	横川 誠	元国分寺市社会教育委員
	岡崎完樹	東京都教育庁地域教育支援部 管理課理職文化財係長

### 【武藏国分寺跡調査・研究指導委員会】

委員長	坂詰秀一	(考 古) 立正大学名誉教授
委員	藤井恵介	(建築史) 東京大学大学院 工学系研究科准教授
委員	佐藤 信	(古代史) 東京大学大学院 人文社会系研究科教授
委員	酒井清治	(考 古) 駒澤大学文学部教授

### 【事務局】

事務局長	福田信夫	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課長歴史係長
事務局員	田中明仁	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課文化財保護係長
	太田和子	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課文化財普及担当 係長
	松田重紀子	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課史跡係主任
	中谷まり子	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課文化財保護係嘱託
	佐々木徳明	国分寺市遺跡調査会

### 【調査団】

团长	坂詰秀一	立正大学名誉教授
主任調査員	上敷領久	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課史跡係主任
調査員	小野本敦	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課史跡係員
	中道 誠	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課史跡係嘱託
	立川明子	国分寺市教育委員会教育部 ふるさと文化財課史跡係嘱託
調査補助	井口正利・桂弘美・小池和彦・藤崎努・石丸あゆみ・大里宗也・大高広和・高橋想・谷口扶里夏・鶴見諒平・富永正義・林正之・平塚恵介・平原信崇・松吉祐希・三宅雄太郎・山本祥隆・青山道夫・佐々木義身・鈴木道夫・百瀬兵一・大羽正子・野村美智子・小林幸江・山口啓子・若林雅子	

### 【国分寺市文化財愛護ボランティア】

田中康敬・小松敬明



武藏国分寺跡調査・研究指導委員会現地视察



南門跡発掘現場見学会風景



講堂跡発掘現場見学会風景



発掘体験教室・ボランティア養成講座

## 7. 本書の編集・執筆は坂詰秀一団長の監修のもとに、中道誠が担当し、福田信夫、上敷領久、小野本敦、立川明子がこれを助けた。

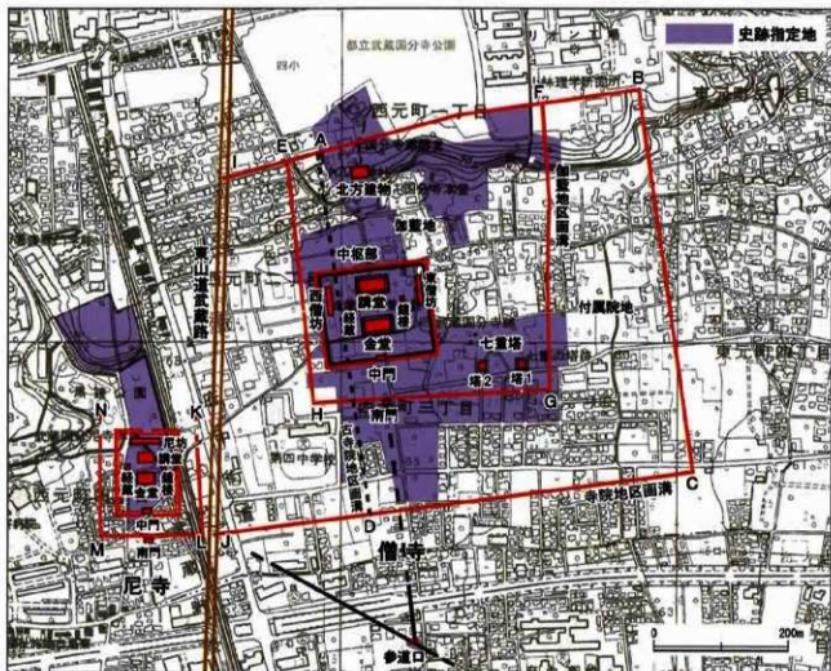
## 調査区の設定

平成20年度調査は、南門地区・金堂前面地区・講堂地区・中枢部区画施設北辺地区を対象に、武藏国分寺跡第642次調査として、平成20年6月13日から平成21年3月31日まで、面積659.04m<sup>2</sup>の範囲を買収地内において実施しました。

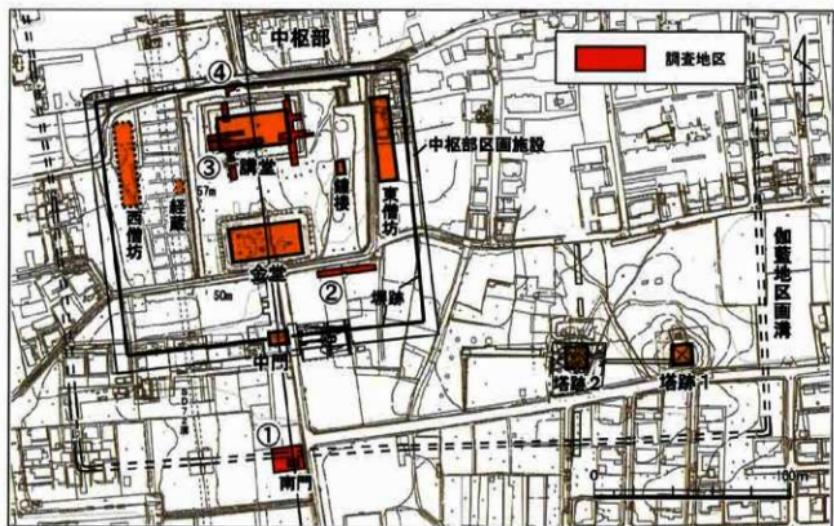
出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のMKを冠し、「MK II・III-642-以下台帳番号、登録番号」のように註記してあり、全て国分寺市教育委員会で保管しています。遺物は瓦類を主として、土器類などが出土しています。

平成20年度調査区（武藏国分寺跡642次調査区）一覧

地点番号	地区名 (整備ゾーン)	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査地番 (西元町)	調査期間		発見遺構
				開始	終了	
①	南門地区 (南門地区)	184.08	三丁目 2101-7・8	6/13	2/5	南門跡1、沸跡2、橋脚遺構1、硬質面1、小穴71
②	金堂前面地区東 (伽藍中枢地区)	86.85	三丁目 2111-2・3	7/28	11/6	小穴33
③	講堂地区 (伽藍中枢地区)	374.25	二丁目 1609,1610-1 ～3・ 1619,1621	11/6	3/31	講堂跡1、不明掘り込み4、 柱穴1、土坑2、小穴59
④	中枢部区画施設北辺地区 (伽藍中枢地区)	13.86	二丁目 1610-3・1621	12/5	3/31	堀跡1、溝跡1、小穴6



遺跡全体図



調査位置図

## 南門地区の調査

### 南門跡の調査

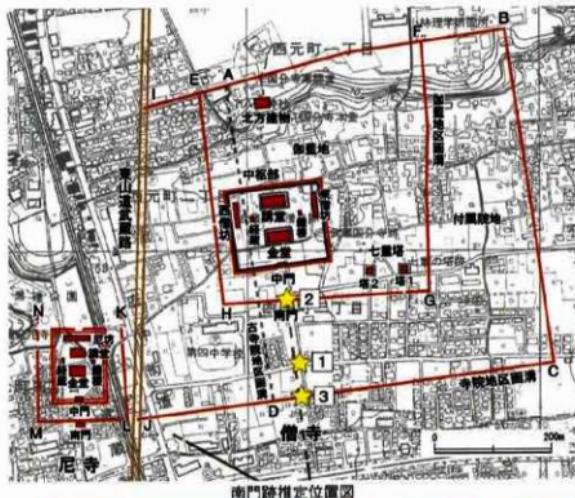
門の規模・構造から「南門」と遺構名称を変更することとなり、それに伴い地区名も從来の「南大門地区」から「南門地区」へと変更しました。

#### (1) 調査区の概況

南門跡の位置は、これまで3カ所(①～③地点)が推定され、既往調査は以下の通りです。

1カ所目は、金堂から南へ約216m地点に当たり、東京府の調査(大正11年)で、瓦が堆積して高まった場所として、南大門跡の推定地(①地点)とされました。また、ここは「薬師大門」と呼ばれた場所で、明治のはじめには、礎石が4、5個あったが、その後、持ち去られて大正11年には一つも残っていない状況が報告されています。

その後、昭和33年度に、日本考古学協会によって、当該地の発掘調査がなされました。調査の結果、基壇、礎石、礎石据方等の痕跡はなく、門跡は検出されませんでした。また、古瓦が出土するものの、その量は多くないと報告され



昭和33年度南門地区から伽藍中枢部を望む（南から）

ています。さらに、本地区は伽藍地南辺区画溝から南へ約100m地点、寺院地南辺区画溝からは北へ約55m地点であり、区画施設が伴わない位置であることから、門の設置場所としてはそぐわない地点であります。

2カ所目は、金堂から南へ約120mの伽藍中軸線上に位置しています（②地点）。②地点も①地点とともに、昭和33年度に日本考古学協会によって調査され、その結果、4つの礎石据え付け痕跡かと想定される遺構が確認され、南門跡と想定されました。その他

の遺構は、東西溝1条（SD23伽藍地区南辺溝）や、南北溝2条等が検出さ

れ、2地点と同様に瓦が出土したこと

が報告されています。門跡については、小規模で構造が不明であることなどから、疑問符が打たれました。

3カ所目は、寺院地南辺区画溝の伽藍中軸線上が推定地として挙げられます（③地点）。当該地

は、小規模でありますのが調査され（武藏国分寺跡第348次調査）、寺院地南辺区画溝（SD17）等が検出され

ましたが、門跡などの建物跡は未検出でした。

以上の3地点がこれまでの南門跡の推定場所とその調査状況です。①地点や③地点は調査範囲が小規模であるため、門跡が確認される可能性が残りますが、②地点が有力な候補地として考えられました。

## （2）調査の目的と経過

平成19年度に、南門跡の位置・規模、および、伽藍中軸線を確定させる上で検討するデータを得ること、また、門と伽藍地南辺区画溝との関係や、参道敷きなど未確認遺構の検出などを目的として、昭和33年度調査区（以下、旧調査区）を中心に、東西約15m、南北約12mの調査区を設定して遺構の確認を行い、平成20年度も継続して調査を行いました。今回の調査の結果、「南大門」から「南門」へと遺構名を変更しました。



昭和33年度調査風景（南西から）



南門地区調査風景（南から）

### (3) 平成20年度調査の主な成果

平成20年度調査によって判明した主な調査成果は以下の通りです。

1. 南門跡は、周囲約4.5mの礎石建ちの棟門で、それぞれの親柱の背後（北側）に各1本の控柱が伴います。親柱と控柱との間隔は約2.3mです。
2. 南門跡は、伽藍地南辺区画溝の外側（南側）に位置し、区画溝には木製の橋が架けられた時期があったと考えられます。



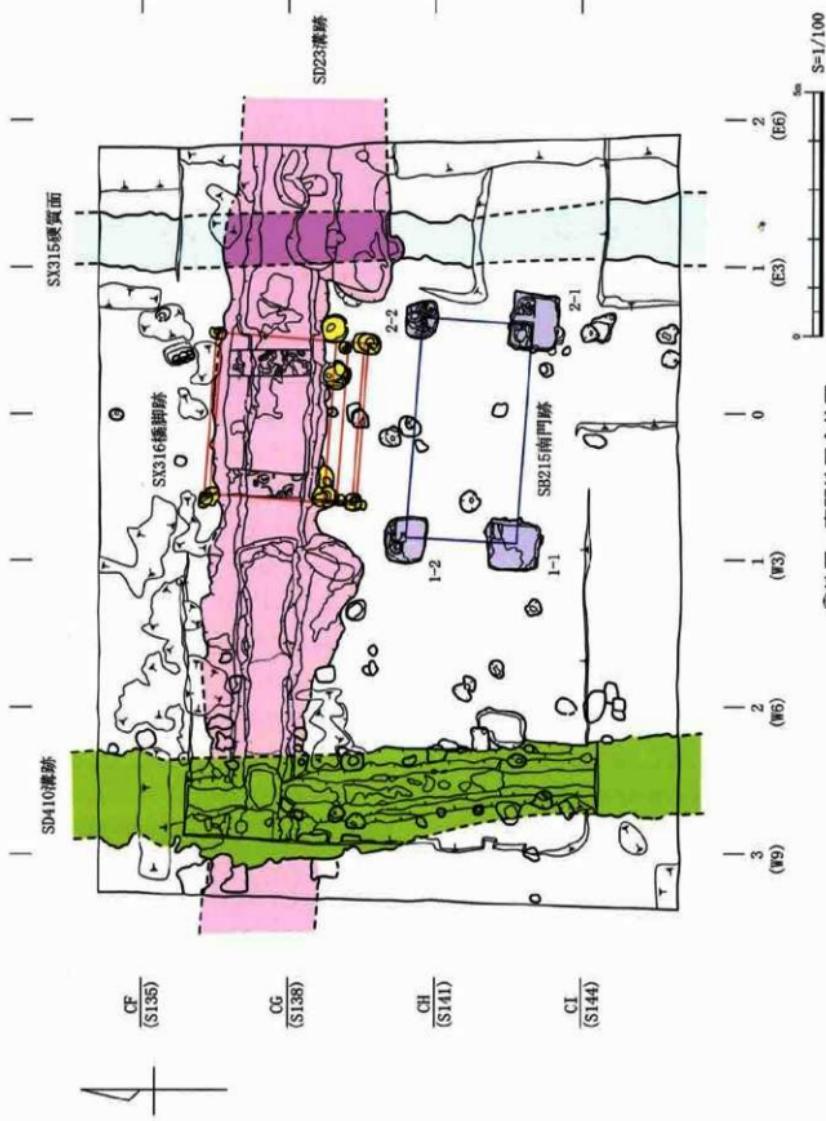
南門地区全景

### (4) 主な発見遺構と出土遺物

地表下0.55~0.75mの暗褐色土～黄茶褐色土（Ⅲb～c土層）で遺構確認を行いました。なお、旧調査による確認面はⅢc土層で、今回、新たに調査した範囲はⅢb土層が遺構確認面です。

検出された遺構は、SB215南門跡、溝跡3条（SD23伽藍地区画溝、SD410溝跡、近世以降の溝）、橋脚遺構1件、硬化面1件、その他に柱穴を含む多数の小穴です。

なお、遺構の覆土は、旧調査によって多くは掘り下げられ、SB215南門跡は確認面から深さ最大約0.4m、SD23溝跡は底面の一部を除く全体、その他、小穴なども完全に掘削された状態で今回確認しています。



①地区 南門地区全体図



SB215 南門跡確認状況全景（南から）

#### SB215南門跡

**位置** 金堂心から南約115m、中門建物心から南へ約65m地点で、伽藍地南辺区画溝（SD23）の南側に位置します。建物の中軸線は伽藍中軸線がやや西にずれ、その傾きは伽藍中軸線に対してやや東偏し、伽藍地南辺区画溝（SD23）と近い傾きを示します。

**建物** 碇石建ち建物で、南側の礎石据付掘方1・1・2・1は規模が大きく、北側の礎石据え付け掘方1・2・2・2は規模が小さいため、南側の二本が親柱で、その背後にそれぞれ控柱が伴う棟門と想定されます。間口（東西）約4.5m、親柱と控柱との距離は南北約2.3mです。

**建物基礎** 碇石下部の壺掘り地業（地固め）が確認されました（礎石据え付け掘方1・1・2、2・1・2）。旧調査で掘削していましたが、礎石据付掘方2-1では、底面からローム土、黒褐色土、ローム土の版築層が確認されました。なお、基壇や基壇外装、礎石や根固め石は未確認です。



南門跡礎石据え付け掘方 2-1（南から）



南門跡礎石据え付け掘方 2-2（北から）



SD23 溝跡 全景（西から）



SD23 溝跡 南北断面（東から）

#### SD23溝跡（伽藍地南辺区画溝）

SB215南門跡の北側で確認されました。溝の形状は、南門の北側は幅が狭く、浅い掘りで、その両側は幅が広く、深い掘りになっています。旧調査範囲は、溝の覆土がほぼ完全に掘り下げられているため、詳細は不明ですが、形状から溝の掘り直しが数度あったと考えられます。

#### SX316橋脚遺構

SB215南門跡の北側のSD23溝跡を挟んで、南側と北側とに複数の小柱穴が確認され、木製橋の橋脚と想定されます。溝が開口していた時期には、橋が架けられていたと考えられます。

位置や規模、形状から溝の南側と北側との各2つの計4つが組み合うものと考えられ、東西幅はおよそ3mになります。なお、溝の北側は南側より確認された柱穴が少ないので、溝の掘り直し等で確認できなくなったものと想定されます。

#### SD410溝跡

上面幅約1.45m、底面幅約0.45m、深さ約0.9mで、掘り込み形状は「V」字状で上部が開きます。

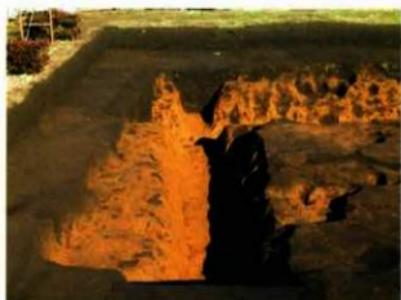
僧寺伽藍中軸線に対して東偏する南北溝で、北限は不明ですが、中枢部区画施設南辺塀の柱穴や寺院地南辺区画溝を切り、寺院地南辺区画溝の外で西に折れています。位置や規模などから古代国分寺以後の何らかの区画と想定されています。

#### SX315硬質面

南門跡の東側で、南北に延びる硬質面で幅約1.5m、深さ約0.2m。上層から永楽通宝が出土しました。



SX316 橋脚遺構（北から）



SD410 溝跡（南から）

# 伽藍中枢地区の調査

## 金堂前面地区の調査

### (1) 調査の目的

金堂前面地区東は、伽藍中枢部を分割する区画施設（金堂・講堂等と僧坊とを区画する施設）の有無を確認すること等を目的として調査区を設定しました。

### (2) 主な調査成果

主な調査成果は以下の通りです。

1. 調査区範囲内では、伽藍中枢部を分割する区画施設は確認されませんでした。
2. 金堂前面の伽藍中軸線上の調査（第625次調査）で、幢竿遺構や多数の小穴（柱穴含む）が検出された状況に比べ、遺構検出頻度は少なく、伽藍中枢部内における空間利用の差が示される結果となりました。

### (3) 主な発見遺構と出土遺物

地表下約0.5～0.6mの暗褐色土～黄茶褐色土（Ⅲb～c土層）で遺構確認を行いました。

検出された遺構は、小穴33件（内、柱穴12件）です。

柱穴跡は12あり、規模は最大のものでも直径約0.7mの中・小規模のものです。規模・形状や覆土などの類似性から組み合うと想定されるものがありましたが、明確に掘立柱建物跡や礎跡などの配置をなすものは、確認されませんでした。

なお、調査区中央で比較的大きな柱穴がいくつか検出された位置は、北の延長線上に推定鐘楼跡があり、これらの柱穴が、仮に中枢部を分割する南北の区画施設の一部と、想定すると適当な位置ではないと言えます。



金堂前面地区全景（西から）

## 講堂地区の調査

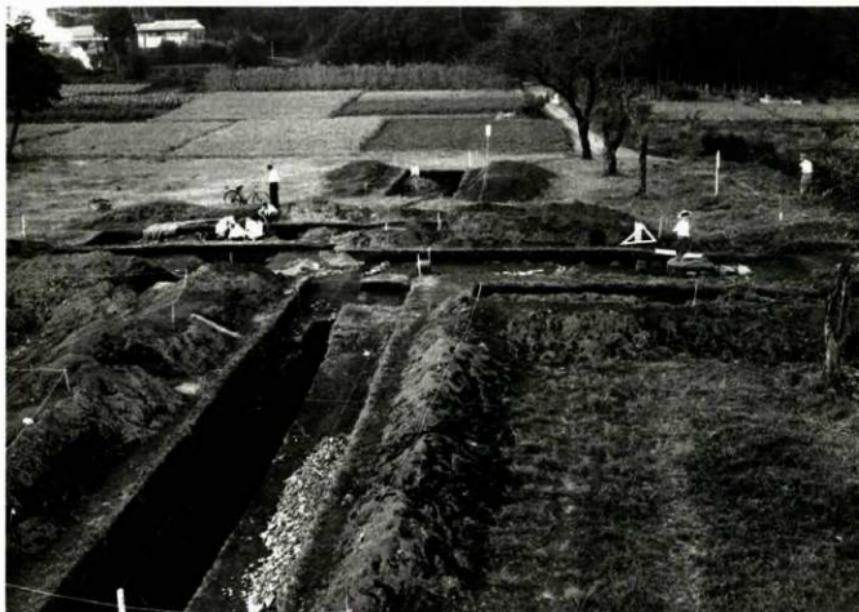
### (1) 調査区の概況

武藏国分僧寺跡は、明治36年に重田定一らによって表面観察による礎石の分布調査がなされ、講堂跡において、関連するものとして16個の礎石が報告されています。大正11年には東京府により、国史跡と指定される際に分布調査がなされ、講堂に関連するものとして礎石9個が確認されています。

その後、昭和31年に、日本考古学協会佛教遺跡調査特別委員会により、武藏国分寺で初めての発掘調査が金堂跡とともに行われました。講堂跡の西側が調査され、基壇構造や礎石の据え付け状況、基壇増築の痕跡などが確認されました。その後、昭和40年代に講堂跡の東側の調査が行われました。



大正11年僧寺中枢部と国分寺崖線（南から）  
推定經藏跡から國分寺崖線を写した写真です。講堂跡はこの写真の右手に位置します。



昭和31年度講堂跡調査風景（南から）

## (2) 調査の目的と経過

本年度は、昭和31年度調査区を対象に、講堂遺構の位置、礎石据え付け状況、基壇規模や構造を再確認し、さらに、基壇東側に新たに調査区を設定し、創建・再建時の基壇の位置や規模、構造を確認して、伽藍中軸線を確定させる一資料とする目的で調査を行いました。

講堂跡の東側については、旧調査（昭和40年代）が実施されていることがわかり、今回設定した範囲はおおよそ旧調査範囲内となります。

なお、本年度調査区で確認できなかった点については、来年度に新たな調査区を設けて調査を継続する予定です。本年度の講堂東側調査区については、遺構確認を終了したのみで、図面作製などについては次年度に補足調査を行います。

## (3) 昭和31年・40年代調査の主な成果

昭和31年度・40年代の主な調査成果は以下の通りです。

1. 講堂建物は、桁行5間、梁行4間から、基壇を増築し、東西各1間分を増やして、桁行7間、梁行4間に広げていることが想定されました。
2. 講堂建物の規模は、創建建物が桁行95尺（約28.2m）、梁行が55尺（約16.3m）、再建建物が桁行122尺（ $13+18+20+20+20+18+13$ 尺 = 約36.2m）、梁行56尺（ $13+15+15+13$ 尺 = 16.6m）と推定され、再建講堂は金堂跡とほぼ同規模と想定されました。
3. 増築基壇部分を壊す掘り穴の中から、性格不明の輪形土製品、天聖元宝（1023年）、元祐通宝（1086年）、塑像、銅製品、ガラス片などが出土し、講堂跡の廃絶時期に関する資料が得られています。



昭和40年代 講堂跡調査風景（北から）

河原石の列とその上に瓦が積まれた状況の写真で、今回、講堂跡創建瓦積基壇外装（東面）と判明しました。



平成20年度調査風景（東から）

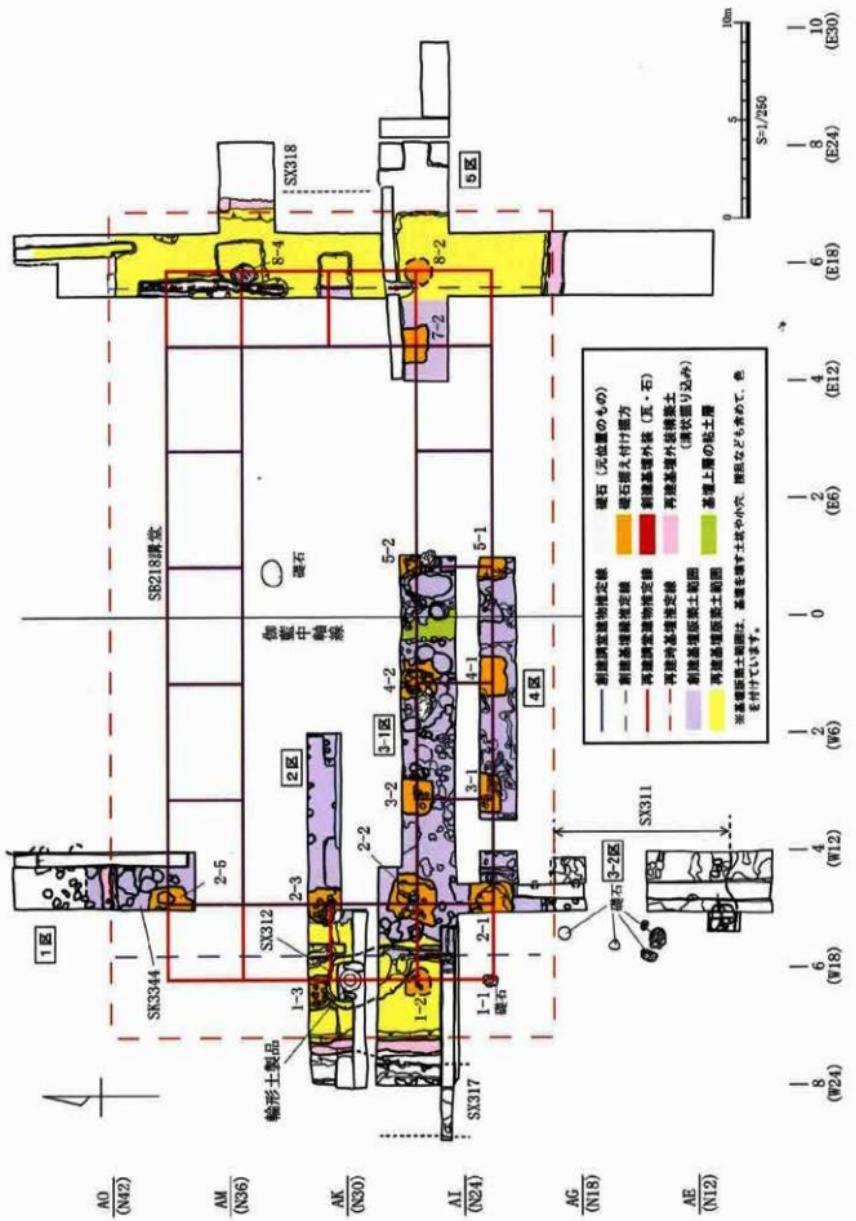
#### (4) 平成20年度調査の主な成果

平成20年度の主な調査成果は以下の通りです。なお、次年度に調査を継続するため、今回は中間報告となります。

1. 講堂は、僧寺金堂跡とほぼ同規模に建て替えられたことが再確認できました。
2. 講堂建物は、創建時の桁行5間、梁行4間から、再建時に基壇の東西両側を増築して、桁行7間、梁行4間へと、東西各1間分を加えていることを再確認しました。
3. 創建講堂建物が南北二面廂建物（切妻造）で、再建講堂建物が四面廂建物（寄棟造、もしくは、入母屋造）と想定されます。
4. 創建時の講堂基壇外装は、瓦を積んだ基壇外装と想定され、基壇東辺では、河原石を基底（地覆）としていることが分かりました。
5. 8世紀中頃に創建され、再建時期は9世紀後半頃と想定されます。
6. 基壇周囲に焼土が見られ、廃絶との関連を示す事象として注目されます。



平成20年度調査区全景（上から）



## (5) 主な発見遺構と出土遺物

地表下約0.2m～0.8mで遺構確認を行い、SB218講堂跡、不明掘り込み3、柱穴1、小穴多数などを検出しました。なお、遺構の断面観察は、主に旧調査のトレンチ断面において行いました。

### SB218講堂跡

**建物** 創建の桁行5間、梁行4間の南北二面廊の切妻造から、再建時に桁行を東西各1間分広げ、桁行7間、梁行4間の四面廊建物で、入母屋造、もしくは、寄棟造へ建て替えられます。

建物の規模は、創建が桁行約28.5m（18尺+20尺+20尺+20尺+18尺）、梁行約16.6m（13尺+15尺+15尺+13尺）で、再建建物が桁行約36.2m（13尺+18尺+20尺+20尺+20尺+18尺+13尺）、梁行約16.6m（13尺+15尺+15尺+13尺）と想定されます。再建時の規模・構造は金堂とはほぼ同規模となります。



講堂跡西側確認状況2、3-1区（北から）

写真中央の瓦列が創建瓦積基壇外装です。これをはさんで左側が創建基壇、右側が再建基壇範囲で、No.1-2・3、2-2・3の礎石・礎石据え付け痕跡が確認されました。

**礎石・礎石据え付け痕跡** 純石は現況で基壇上に6個確認できますが、今回の調査で確認したNo2-2・8-4と、未調査のNo1-1が元位置（再建時）を保っていると考えられます（ただし、No2-2は割れしており、若干、元位置から動いている可能性があります）。石材は、チャート（No1-1・2・2）と砂岩（No8-4）との自然石が使用されています。礎石が残存しているNo2-2・8-4の他に、礎石を据え付けるための根固め石や礎石据え付け掘方（礎石下部の掘り穴）が、No1-2・3、2・1・3・5、3-1・2、4-1・2、5

- 1・2で確認されました。礎石据え付け掘方の規模は、No2-2で一辺が約2.3~2.5mほどあります。礎石据え付け掘方の形状は、大別すると創建時が隅丸方形で、再建時が略円形をしています。



#### 2-2 磁石据え付け状況 調査風景 3-1区(南東から)

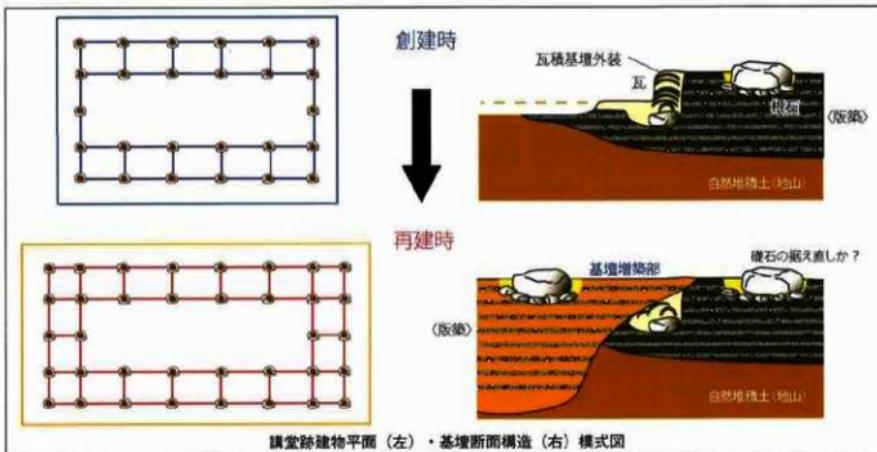


#### 8-4 磁石および根固め石 5区(東から)

**基壇** 創建基壇は、外装に瓦を積んだ瓦積基壇と判明しました。旧調査でも確認されていましたが、創建基壇外装という認識に至っていませんでした。基壇の東面と西面とで確認され、再建基壇増築に伴って大半が壊され、外装の下の部分が残存していました。なお、基壇の南面と北面とは未確認です。東面では、南北一列に並んだ河原石が確認され、今回の調査では確認できませんでしたが、昭和40年代の調



創建基壇東面外装 地覆とした河原石 5区（南から）



査写真には、この上に完形の男瓦が南北方向に据えられており、河原石を基底（地覆）としていることがわかります。西面では、南北一列に並べられた完形の男瓦が確認されており、東面と対応しています。ただし、河原石を基底としている状況は未確認で、旧調査トレンチの観察では、女瓦片を重ねて基底としている状況が見受けられるので、部分的に異なる部材を使用している可能性もあり、次年度の調査で確認します。

男瓦の上部は東面・西面ともに、再建増築基壇の掘り込みに向かって、瓦がずり落ちている状況が確認でき、さらに、西面では男瓦の上に完形と思われる女瓦がずれた状態で確認できることから、男瓦の上には女瓦が重ねられたと想定できます。

創建基壇規模は、東西約344m、南北は再建基壇とほぼ同じと想定できます。

再建基壇外装の部材は未確認です。ただし、基壇縁に沿って確認された溝状の掘り込みが、基壇外装設置の際の工事によるものと考えられます。創建時基壇外装も同様で、造作する際に、まず、基壇の縁を溝状に削り、土を埋め戻して、河原石や瓦が積まれます。この痕跡から、再建基壇規模は、およそ東西42m、



創建基壇西面外装 3-1区（南から）



創建基壇外装男瓦 3-1区（東から）



増築基壇により壊される創建基壇外装 3-1区（北から）

南北22mと想定できます。

基壇上面について、礎石据え付け掘方4・1と5・2との間（建物中央間）において、白色粘土層が地表下約0.2mで確認され、基壇上面の設えの可能性が考えられます。基壇上面の設えが、粘土敷きであったか、もしくは、埠敷きの床とした場合に、その構築材であった可能性がありますが、埠が設置された痕跡は確認できていないので、推測の域を出ません。



基壇上層で確認された白色粘土層 3-1区東側（南東から）

**掘り込み地業（地固め）・版築** 創建時期は建物全体におよぶ掘り込み地業（総地業）で、厚さ約0.6m（残存する礎石天端から復元すると約0.9m）の版築がなされます。版築は下層が黒色土・暗茶褐色土と砂礫層との互層で、上層にローム土主体の版築層が見られます。

再建時期は、創建期基壇の東西両側に東西幅約6～7m、南北20数m、深さは基壇周りの整地層上面から約0.7mの規模で掘り込み地業が施されます。版築は、厚さ約1.2m（残存礎石天端から復元すると約1.5m），下層は多くの礫や白色粘土、ローム土を含む黒褐色土層で、上層はローム土と砂礫層との互層を主体としています。版築内には瓦が混入し、その他、炭化物・焼土粒が微量含まれています。なお、昭和31年度調査では、版築内から七重塔再建期の鎧瓦が出土しています。



創建基壇版築 1区（南から）

創建と再建とでは掘り込み地業・版築の仕方が大きく異なっていることが分かります。



再建基壇版築 3-1区（北から）

その他 基壇周囲には、白色粘土混じりの黒褐色～暗茶褐色の粘性土の整地層が確認され、再建時の整地と想定されます。整地上層に焼土や焼土を多く含む層が堆積した状況が確認されました。

#### SX311・317・318不明掘り込み

SX311不明掘り込みは、講堂南面（3-2区）で検出された南北約8m、東西不明、深さ0.6mの規模の大きな掘り込みです。覆土に多くの白色粘土やローム土が混入し、人為的に埋め戻されています。

SX317とSX318不明掘り込みとは、講堂跡の東西で確認された規模の大きな掘り込みで、東西幅約3.3m以上、深さ約1.3mで、基壇に沿って南北に長い掘り込みと想定されます。覆土は、黒色土主体で白色粘土を含みます。両者は規模・形状・覆土から類似しており、同様の性格を有するものと思われます。

これらの不明掘り込みは、いずれも基壇や整地などに必要な土を採取する土採り穴と想定されます。

#### SX312不明掘り込み

講堂増築基壇を切る不明掘り込みで、昭和31年度にも調査され、直径約1.1m、厚さ約0.25mの輪形土製品が確認されています。表面は被熱し、上面（大半は欠損）には低い段差が見られます。性格は諸説ありますが明確ではありません。その他に、旧調査では宋銭（天聖元宝＝初鋤1023年、元祐通宝＝初鋤1086年）や焼けた塑像、焼けたガラス片が、本年度でも宋銭、青銅製品などが出土しました。



輪形土製品再発掘状況（北西から）



昭和31年に目印として埋められた日付入りの石



輪形土製品全景（西から）



輪形土製品上面近影（東から）

#### （6）今後の課題

今後の課題は、1) 講堂建物位置・規模の確定、2) 再建時の基壇規模の確定、3) 創建・再建時の基壇外装の部材の確認、4) 創建・再建年代、5) 南北面の階段の有無の確認などが挙げられ、次年度調査する予定です。再建時期については、増築基壇内から9世紀中頃に比定される瓦が出土しており、9世紀後半と想定しています。また、講堂が再建に至る経緯についても、伽藍全体の造営過程の中に位置付けて検討するとともに、弘仁9（818）年や元慶2（878）年の地震との因果関係なども考慮に入れて、今後、総合的に検討する必要があります。

## 中枢部区画施設北辺地区の調査

### (1) 調査の目的と経過

中枢部区画施設は、中門から派生し、金堂や講堂、鐘楼、経蔵、東西僧坊を区画する塀と溝です。塀については掘立柱塀から築地塀への建て替えが南面塀の調査で確認されています（第578・603次調査）。今回は、この中枢部を区画する北辺塀の位置と規模、構造を明らかにする目的で、調査区を設定しました。

### (2) 主な調査成果

主な調査成果は以下の通りです。

1. 中枢部区画施設北辺塀の掘立柱塀を確認しました。
2. 築地塀は検出されませんでしたが、区画塀の内側の溝跡覆土が、築地塀の崩壊土と想定され、掘立柱塀から築地塀への建て替えがあった可能性があります。

### (3) 主な検出遺構と出土遺物

地表下0.4～1.1mの整地土層（黒色土）で遺構確認を行いました。中枢部区画施設北辺塀のSA12掘立柱塀（柱穴3つ）、溝跡1条などが検出されました。調査区は昭和47・48年度整備前まで道（薬師道）として使用され、その影響か、確認面が硬化している状態でした。

#### SA12掘立柱塀跡（中枢部区画施設北辺塀）

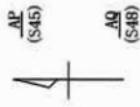
東西に並ぶ柱穴3つ、柱間2間分が検出され、一回の柱抜き取り痕跡が確認されました。いずれも全体は未確認です。柱間は8～9尺で、今後、他地区的調査と合わせ、検討します。

#### SD415溝跡

SA12掘立柱塀跡の塀芯より南に約2.8m地点で確認された東西溝跡です。規模・覆土などから、中枢部区画施設南辺塀の北側（内側）のSD396・398溝跡に類似します。覆土は築地崩壊土と想定される白色粘土等を含むローム主体土からなり、掘立柱塀から築地塀への造り替えを示す事象として注目されます。



調査区全景（西から）



	AP (SA45)	AQ (SA48)											
8			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
(E24)			(E27)	(E30)	(E33)	(E36)	(E39)	(E42)	(E45)	(E48)	(E51)	(E54)	

②地区 金堂前面地区全体図

S=1/150

■ 小穴・柱穴



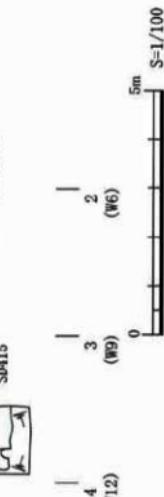
SA12掘立柱跡柱穴全景 (南から)



SD415調査全景 (南から)

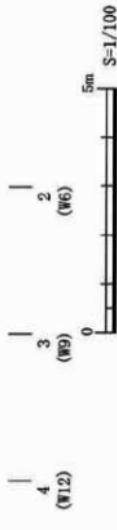
■ SA12掘立柱跡柱穴

SD415調査



④地区 中枢部区画施設北辺地区全体図

AP  
(NSI)



AP  
(W12)

3  
(W9)

4  
(W6)

2

5m

S=1/100

■ 植土は白色粘土を含むローム土主体で、築地盤の崩壊土と想定されます。

国指定史跡 武藏国分寺跡

－平成20年度

保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－

発行日 平成22年3月31日

権著者 国分寺市遺跡調査団

(○(团长 坂詰秀一))

発行所 国分寺市遺跡調査会

国分寺市教育委員会

〒185-8501 国分寺市戸倉1-6-1

TEL 042-325-0111(代表)

印刷所 プリントショップ国分寺